

『人夫考』の紹介

高木護著 未来社発行

この本を書いた高木さんは熊本県生れ。おそろしくいま五十代半ばだろう。はたらしはじめは十四歳というから、昔の尋常高等小学校といった時分の小学校の尋常科へ六年まで、これが義務教育といわれた一か、そのあと二年やる高等科が、どちらかを終つてすぐはたらいたにちがいない。トシ区かぞえ年というのと満でいうのと二年のちがいは消えてしまふのだが、高木さんの「十四歳」がかぞえ年か満かはちよつとわからない。どっちにしても、戦争に負けて外地から帰ってきた経験も考えれば若くて五十代半ばと想像できる。いま釜ヶ崎に五十代の労働者がどのくら

うとうとこした。

寒いなと思った。

ころかっけていても、こんからは眠れなかった。駅の待合室の片隅をめぐらにしようなんて、二、三日前までは思つてもみなかた。それまでに、駅には再三お世話になつていたが、ぶらぶら旅の途中での一晩か二晩の厄介だったので、宿でいても起きていても案ちゃんといえた。見知らぬ町の駅での泊りは、たとえうらぶれた思いに囚われても、かえって旅情を掻き立てられた。二、三日前までは、十日ばかり野帳場で働いていた。つまり飯場暮らしだったか、働いていても、賃金がもらえないことが判つたので、逃げ出てきた。

読んでいて、わが身にもあったことを思い出す人が多いのではないだろうか。私もその一人で、一度や二度でない駅泊り、あ

いるのか、無論はつきりした数はわかりつこない。しかし十人に一人、百人に十五人ぐらいいは多分いるだろう。そしてそういう五十代の人々のなかには、三十代四十代になつてから何かのワケがあつて地下足袋をはいた人といれば、ずっと若いときから、同じような暮らしだった人といえる。高木さんの本はあとの方の場合、つまり若いときから、放浪と労働を重ねてきた人の身の上ばなしとすることでオモシロイ。また、そういう身の上ばなしを通してニンゲンなぜ生きてるかを考えさせる点では深刻な本でもある。

高木さんは主として九州のあちこちを渡り歩いた。

それは労働下宿や飯場や安宿やアオカンである。

こんなふうに書いてるところがある。

ついは駅周辺での夜明けを思つた。

たとえば待合室のなかへ入れなくても、駅にはヒサシがあるから雨よけができる。水道があれば便所もある。新聞や週刊誌を拾つて読める。ゼンも、非常に運がよければ拾つたりする。――などの理由で放浪者は駅に寄つて行く。そしてそこでは、行つてみないとポイントかうソかわからないのだがとにかくオイシイソウな仕事の話にぶつかることもある。

高木さんもそんな話にぶつかった。

豚小舎をこねて、こねたあとを整地する話である。話を持ってきた二人と高木さんと三人で五日ぐらいの仕事、終つたとキ一人当り一万円というのである。だが結局、めしを食いドロクを飲み女も一回あてがわれたが約束のオネはもらえなくて、高木さんは相棒の一人と工場の跡という土地で金属クズを掘り、それを売つてシノゲ

のである。

読んでいてオモシロイ、オカシイ。
ただそのオモシロイ、オカシイは知ら
ないうちにうつされた自分の写真を見せら
れるようなオモシロイ、オカシイで、やが
てため息が出てくる。それでいてジメジメ
くないのは、高木さんの天性か、文章のう
まさか、どこまでも明け、放くに風通しの
いい本だからである。

福岡県の久留米市で、高木さんは「宿」
につく。雨の日で、宿には同じようなニン
ゲンがごろごろといてる。みんな手持ちの
何かをカネに代え、カネはショウチュウに
化けて酒盛りとなり、人夫とは何かにつ
いて、お互いの思っていることを言い合っ
た結果を高木さんは書いている。その全部は
ムリだから半分ばかりを写してみよう。

（人夫とは何か） 元手いらず、からだの

と有り。そっくり全部この本に習成るきな
い人でも、どこか身にくみしてくるところが
あるに相違ない。

おけらのカンちゃん

四十男

土方加十年

穴掘り五年に人夫加十年

ええと

ご破算で願いまくては

人夫も土方も同じかね

親方 せっぱり銭貸となっせ

これは高木さんか、おかし紙片れに書いて
たものしたそうである。まだつづきがあっ
て、即らかにしんみりさせるけれど写して
いては長くなるので始まりだけにした。

（T6）

叩き売り。気楽なショウバイ。全持ちにも
えらくもならんショウバイ。余計なことは
考えんないショウバイ。使い捨て。世の
中の役に立っているのに、世の中から下
下、クズ、できそこない、ノータリンなど
と軽蔑されたり、ないかごろにされたり、
差別されたりするショウバイ。倒れなくな
る前に死んだがしいショウバイ。

この本には「ある無名者たちへの挨拶」
という、少しおずかしい題もつけられてい
る。高木さんの墓らこのなかで知り合っ
たそれちがった、そこで知り合ひもそれちが
いさくなかった多くの人々への悲しみ、歌
というような意味に受けとっていいと思う。
千五百円という値段が、高いといえは高
いけれど買えないほどでもない。

涼しくなったら、チゅう一本とサカサと
この本を買いこんで一日過すのも悪くない

第四回労働者渡世賞募集要項

(1) 種類——小説／生活記録／飯塚日記・現

場体験記・交友録など／詩／

短歌／俳句／川柳／漫画。

(2) 長さ——小説／生活記録は四百中詰原稿

用紙三〇枚まで。詩は百行まで。

(3) 宛先——〒557 大阪市西成区萩之茶屋三六

一三四 御振り屋気付 労働者

渡世編集委員会

(4) 賞——小説・生活記録 一万円

詩 一点 五千円

短歌・俳句 一点 二千円

参加者全員に特製手拭を贈呈

(5) 選考——労働者渡世編集委員会

(6) 発表——年末発行「渡世」誌上

締め切り

十月十五日!!

喜望の家娯楽堂開店

本を読んでコーヒー百二十円

喜望の家娯楽堂が五月三日から営業?

している。本は読みほりだい、コーヒー百二十円。

コーヒー代百二十円については話がある。ある人が「コーヒー代百二十円は半端だから百円にすればよかったのに」と言ったところ、店の人が「おれは、あまのじゃくするともわりがわるいから……」ちなみに、喜望の家娯楽堂の前は百五十円でコーヒー百飲ませた。……
書いてある本はどうか、抹茶臭い、いや聖水臭いといふべきか、ともかくそんな本ばかりでなく、……からマルクス・マンがまでマルクスはなかったか、ゆえに……である。借りる時に二五〇円ぐらいの保証金を出して、持って行けば二〇〇円ぐらい

西成警察はバクダン犯人

デッチ上げが好き?

6月26日、百江村とて反府警署部は、4人の釜ヶ崎の鉄筋工を逮捕した。その日の夕刊の見出しは、「三井物産ビル爆破犯人か?」と書き、まるでバクダン犯人が捕まったかのうように書きたてていた。

しかし、記事の中味はバクダンと全然関係ない「傷害罪」でバクられたと書いてある。バクられた本人たちもビックリする報道だ。これは新聞が勝手に想像したわけではない。大阪府警と西成署が意識的に流したデマだった。彼ら4人をバクダン犯人に仕立て上げる芝居の幕上げだった。しかし、この芝居は、多くの仲間への反対にあって、今のところ失敗している。

72年暮のセンター爆弾(と書いて

も、ちょっと便所をこわしただけだが)の犯人に、やはり2人の釜の人間がデッチ上げられ、警察の甘い言葉につられて、ウソの自供をしたため、5年間も大阪拘置所にとじ込まれていた。今年の3月、裁判で無罪になったが、「あいつらならやりかねない」という世間の差別と偏見のため、保釈も許されず、閉じこめられっぱなしだった。

これまでも、「暴動」がおけると警察は、ありもしない煽動者をデッチ上げ、「暴動」の本当の原因(暴力手配師、悪徳商店、違法ドヤ、そして、それを野放しにする警察)をごまかしてきた。

昔から、何かむずかしい事件がおけると、貧乏人がすぐ愛われ、デッチ上げられてきた。八海事件しかり、狭山事件しかり。

市民社会の人間が、「あいつらならやりかねない」と、差別や偏見で

かえりてくれるシステム。労働者連帯も今から置いておらっている。

釜食のミロシク!!

釜ヶ崎日雇労働者の事務所の下にある釜食堂も、よりみんなに喜んでもらえる店になろうと、女客さんからアンケートをとって頑張っている。

アンケートは、「うまいか、まずいか、量は、サービスはどうか」といったもの。六十何人か九十何人が集計したはず。その集計結果は控えて来たのだが、申請しないことに今手もとにはない。が、品数が少ないというのがめったなことだけは覚えておいて、味、量、サービスについては、あまり苦情は多くなかったように思う。せいぜい「釜食のミロシク!!」

釜食のミロシク!!

思っているのを警察が利用して、デッチ上げる。又、自分が貧乏な事を運命だと思っている人々は、すぐものごとをあきらめやすい。デッチ上げられても、助けてくれる家族や友人がいない、たよりになる弁護士をやとり金もない。(国選弁護士もまた、市民社会の予断と偏見をもってやってくる。こんな奴には誰だって信頼しないだろう) そうなれば、あきらめて、むだな抵抗をやめ、少しでも被害を軽くしようとしてよけい、警察にはさからわない。早く出たいがために、ウソの自供をする。こうしたことが、よけいに警察の利用するところとなり、デッチ上げ犯人に仕立て上げられるのだ。

今まで、どれだけ多くの貧乏人が警察のデッチ上げに泣いてきたことか。あきらめてしまっすぎてしまっ九例の多いことか。

気をつけよう、警察の甘い言葉とデッチ上げ!

(A)